

ヨシュア記は、カナンの地を所有すると神の約束は、完全にそうだったとの記録です。
 一方、士師記は、人の不従順と、神による救済が書かれています。

◆ヨシュア記

モーセ五書の約束の成就

ヨシュアの任命	エバル山の祭壇	全面的勝利	3部族、東岸へ
申命記 1:38 ヨシュアが、そこにはいるであろう。	申命記 27章 石の祭壇を築かなければならない。	申命記 7:24 あなたに立ちむかうものはなく、	申命記 3:20 わたしがあなたがたに与えた領地に帰ることができる。
ヨシュア 1:1-9 今あなたと、このすべての民とは、共に立て、このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい。(2節)	ヨシュア 8:30 そしてヨシュアはエバル山にイスラエルの神、主のために一つの祭壇を築いた	ヨシュア記 21:44 主が敵をことごとく彼らの手に渡されたからである。	ヨシュア 22:4 主のしもべモーセが、あなたがたに与えたヨルダンの向こう側の所有の地に行き、自分たちの天幕に帰りなさい。

征服地は実際には残っていましたが、神が言われたことは必ず成るという時間を越えた真実を伝えていきます。ヨシュアと民が神に従順に従い、神の既に定まっている勝利を手にしていったのです。

「わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる。」イザヤ 46:10

◆士師記

士師記 2章から 3章 6節で、「民の偶像礼拝は災いをもたらしたが、神はさばきづかさによって救出した」という士師記時代の概観が書いてあります。その具体例が、3章 7節～16章です。

私のディボーション

早朝、日課のように聖書の順を追って1章読むこと、ディボーションは本来その中の心に残る御言葉からという事ですが、自分はそのような御言葉に出会う機会が少ないのです。(聖書の中には、あちこちに宝石のような言葉が記されているのですが...)そんな訳で朝の祈りは、“今があること”、“与えられていること”への感謝を数えること、そして自分では何ともならないことは神様に委ね“御心のままに”と祈ること、何よりどんな時も平安であることを願います。

そんなことを続けて、いつの間にか聖書通読も3度目に入ったところですが、そのことを通して身についたものは周囲への感謝です。自らの悔い改めはまだまだです。祈りは、自分と家族のことばかりで、広く人々の平安を願うところまで至っていません。只、少しずつ自分が、周りが、そして大切な娘との関係が、変えられてゆくを見るとディボーションの成果かなと感じています。(米沢市 I.T.)

* み言葉は地下水の様に染みわたると言います。この兄弟にもこの命の水が働いているのですね。